

LICENSED PRODUCT
3/Color
White
Magenta
Red
Yellow
Green
Cyan
Blue
Black

三西廊日記

13
470
2

13
470
2



門 海 13
470
卷 2

三曲 鄺日記 朝露全傳 卷二

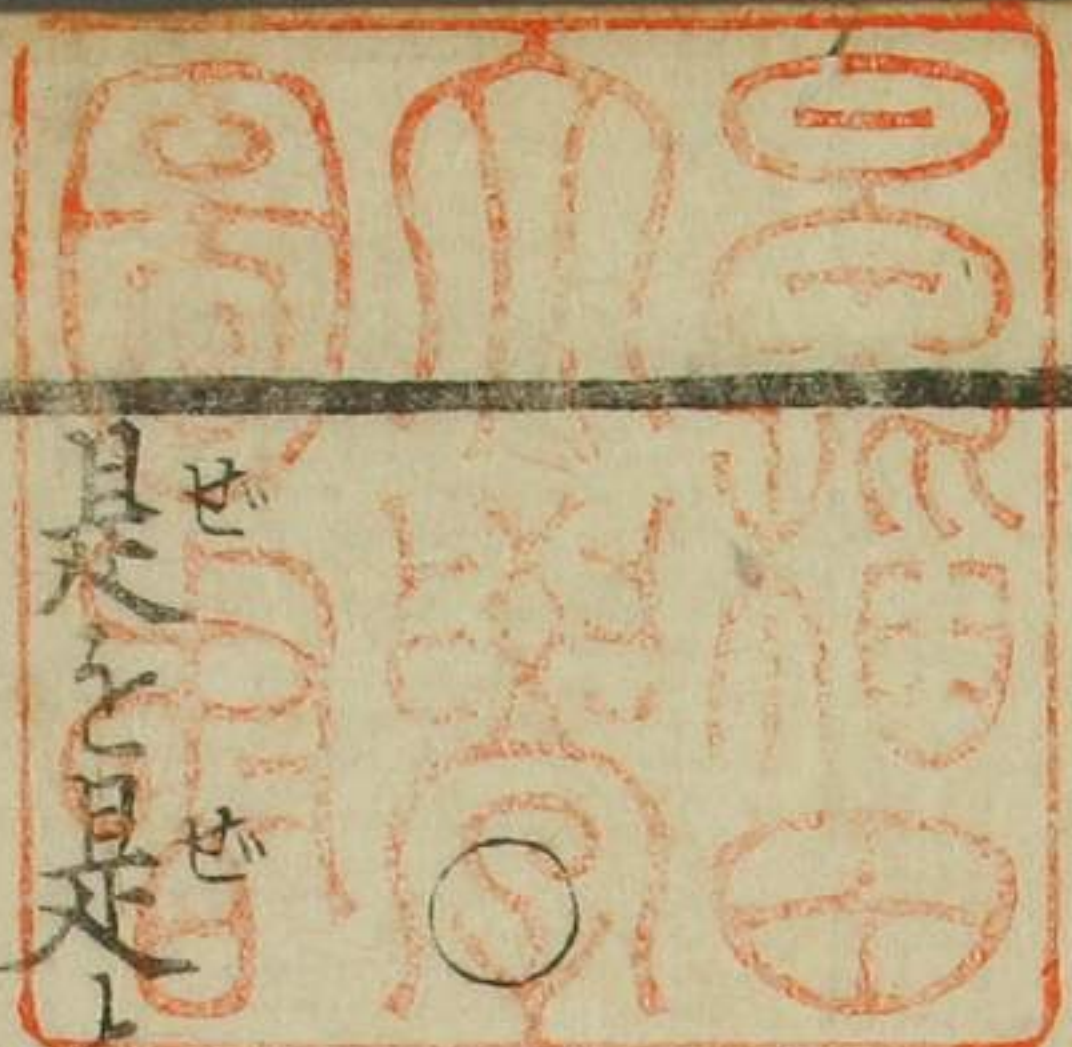
江戸

鼻山人 編著

必 衰 定 離 の 惑 乱
三 界 火 宅 の た と え

是を是とする 則ハ塵小近ノ氷を氷とする 則ハ

小近ノ声あふいり小吏とハ知りまはし雪降り
あし東の路をるふの朋麻平が守のうを尋く
上列の諸ある人と人を偽り時々ぬ道中出てハ旅客



サトニキニ

くらのまゝでもん垂あゝ嘆きくれば胡麻平万端を
うけあゝ海から〜実の父さぬや兄さぬの行儀も捜
しと上ませし夫お付てお母もも少〜の骨折て苦
華るやふるさるかよふた候女子の身で世間をひろく
笑ても歩ゆあゝ〜テ能あゝんが成るものぞトあ
子を組でう涙す〜これ〜兎角人の言〜のぬおで
あゝれが幸しく知れぬコリやごあつても花街の〜ちか
能ら〜トさ〜〜
注〜あけま〜の林あ〜ぬまの是報も

サト二二二

二

ふや苦界ふ沈む倡妓とら夏あも志〜で只廓中の
な〜と〜あ〜や〜らも父の新橋や兄の身の〜を
尋ねん為の〜トさ〜ふた〜食糞子も〜でも厭をぬ
ふで〜ますトさ〜せれたる花街の勉仕胡麻平の
却の〜存〜ふ不傳歌あ〜母〜或日あ〜ら〜を傍〜
江戸町一丁目ある狂女屋巴屋半次と〜る方〜ら〜
我娘あ〜ト傍〜て目〜え〜さ〜せ〜ふ〜事〜あ〜ら〜車〜一〜め〜ら〜ら〜
生質お容貌も傍〜れて〜ら〜〜〜れが半次も荆山の

ナハ二二二

三

璞を好むる心地と是を琢ば遠く連城のも換る
太史職ともあるんと相承相續とあると九十五又年の
勉めなむと共七明々の徳文ふを究て令百五十友清
僕をくらひ大兵侍の働きをなすありといひせせ
尻判も首尾よく押せ双方目出度をも拍て胡麻平
立す海りぬ斯くなきくらひ巴屋が件に在りまづ内
あし給仕るのみを二十日をくらひの定まぬるを世
偏く不娘のどれを扱ひふなきくらひも大にふよろこび

借入身不叶あつる能きありト最末実不仕る吏
より松心堂信統千家生田三弦等の執首古るの利
費の生れ不練きく只樂くする元法をるると余
不測とん付られが斯主人の持賞厚に候二ゆとやと
密く不彼が不問是が不愛ふアヲ利費ある能き
ある愚鈍く死んるるなる彩見の鬼位黒西も東も
苦界の中慈悲も法然の掬無り情も勉めの渡り
初今不えや志かれ真受るのまごまめあつれと

ナト二二二

いづれも... 勉めなるの約... 吾儕は...
まいつまねぬ命... 食禁ありとも...
押さへ入る是非... 身のおもひ...
はひの老を... 戻りて... 十日を...
編み

うさぐ... 衆他も残らす... その先を...
いそれま... 衆あり... 苦界の...
さらぬキ... 衆あり... 涙ふむせう...

ちろと啼きし〜くち捨てられ使ひあはせお尋ね尋ねを
 木くら落るる山嶽のふけく枝もあつりくう半女
 支奴も百々千あのを合不梅する代のあれが身の人を
 大切とさぬぐふ心を添へ〜聴かぬやどりつともてん
 あるれど今とあつては捨るがあは甚なるも実の父
 さぬや見さぬやも巡り送るふ公頼あはが壱とごらあま
 術あはるのあまや壱忍〜時節を待たぬれらきくら
 の勉めなると一撓ふりくばさうから地獄の責受ふ

中ふおの思ふが決〜とさういふ決でいあはあて難面
 日のおれが哭てら〜き夜もあひ巴がき作不客
 の意對ズレドままさんごなるゆめあるまうさうおのて
 酒つらちんがしてとされ某もは花街でん二ともあはぬ
 巴屋の半女とやとの胡雪方孫内さぬといふお名残
 夢みて居れば附會度きさ兒ぐ〜で第一は衆の新
 見る中〜なるゆがあるまふゆめのもほし又は通つ〜官を
 消らず教多の客の〜中まをさ〜とく〜を



付くあはらの見さぬちの逆りぐう道まるの外ふあは
 花街をうりおやうて其方一人倡妓をすすむもあは
 花街をくふ不簡あふあど中しそ入却りて方のたあ
 あらばト是旅の二を割流して夫をよさすがああ
 けらま縁で締る首拂ハ美理と情のいつ緒りあさ
 くらも今更お詮方あきの松のちもあふああはね身の
 災難トつゆりの尋り実の兄さぬお巡りあへんの
 花街をうりトあはこれのまを写すよしていふまがふま

ます外お使りのあお私しはくともお由ま婦さぬか情
 おけてもさうませトまぬのまおを措く俯容繕ま
 散涙熱れおとるんふらう半女まぬもられをんて
 可解り簡しとられと維令使りのあお身の上でも力を
 扱するのあおおがすあがらも縁あつてはあかの勉仕
 人とあはがまや娘由月希や他人のちうお扱のあはあ
 実利おらまますのト是よりさうつれお使をかへて
 内流ふさ〜垂馬管柱花をを学すするの他ふりほ

是を深窓雛妓ひろきょしんぎとらぬ突おりのをもくよりたの又
 職の位を踏ふみむの最尊もつととす茶ちが智ち仁に信しん勇ゆう忠ちゆう
 の又才備さいそひらざれば大將たいしやうと秘ひまらるるのちあはれ均ひとしく
 倡妓けいぎも又くくありちんぎよ沉奠落雁ちんけんらくがんの容貌ようがう閑い厚こう羞しゆう
 花はなの粧よそぢひのふあはれ天性てんせい聡敏そうびんあして又才さい気き不ふ
 詔みことぬが貴人きじんの巻まきまき花はなといふあはれざるがゆふもあまん
 是を教まを慣なせりされば横雲よこぐもの別わかれを惜あはむ天明あちうめいの
 鐘かねを恨うらみると皆みな情なさけをひきく們的めいの老らうあして偕あひら老らう

同穴どうくつの契ちぎも比ひ驥き連理れんりの枝えだひも涙なみだふふあはれ仇あだ
 枕まくら波なみだふのち是を系ちぎふ係けいる薄情うすなさけのものト解と解とつ
 迷まよへる老らう人の心こころは我われふのこ実まことをころせるト母ははの心こころは
 紀あきよるさう情なさけむびり情なさけふがう夫おとこハ決さだまるふ又
 宮戸川みやとがわの流ながれ近ちかき邊へふ寶たから屋や禍わざはひ右みぎつといふる
 頗さかる豪家ごうかの町人まちびとあつたう善よきく法はふ候まうたま方かた一ひと出で
 へりして金銀きんぎん融通ゆうつうの辨べんまを今日けふの他業たごふとまふす
 因より家内けいだいふるはひの男女おんなもまなく番ばん頭かみを代しろ調てう布ふ

小者ふもるまぐとれくの管ひぬありて是を勉るふ
 隙をへるる星の家あれば山並みあして年
 久しく使へる者あれば名をこけて生けるは
 ぶれた程の塵をおく一家の姻を結びくれば宝屋
 禍を免つが名あればけうらまへ宮々川も流るる
 ちぬぬのもあつるともくは宝屋の内ふ仙八と
 着のあり知少のせえよう個市をさうして禍を免つ
 婦がまふへる五子日極ふ慈悲をこけてあ育るは

見 仙八もその大息をぬかしておのひ朝も園きようして
 尺骨を掃除あり夜も眠らぬ目をほろけり
 こそ立ぬども人ようを中枕あも付ずぬもらるる美
 盤の積りたふんをぬぐぬればあつる慣つる妻の
 後のでく自然と徳懐面の動定も練まると尺骨の
 ちぬぬも玉極切者あふくれば禍を免つるもなき不悦
 森下七葉のそえ茶髪を剃るとみ代ねとほのあく
 方便をぬけて君はひくるされば徳使をまゐるもあ

第 福右衛門が各代とて出入りあり金指のを金
等も御りる遠ひあくるはまかりはして今も
六最珠じき差のト福右衛門の腕をばし
多仙八あつ時のりあじが角田家の比籠より
今二百ぬ後とて立あしがをやその日もさるく六時
ふき佳をぬらんもお熱れ青時の心配とあひれが
あつて相儀ある船宿へあつてあつてのよを物倍りして
舟を渡りてくれがまらんもいと安きころありとてさるく

あつちり ありあつちり ありあつちり ありあつちり
五合者 ありあつちり ありあつちり ありあつちり
どく寶屋の河原 ありあつちり ありあつちり ありあつちり
引改とたお舟屋をき大川端をのりより何れ
その船屋が身投の一生無令下を漕引仙八が
る舟の途端の拍子飛出てあ警方警弁と愕率をを
をりあり仙八是とるより身投の人とん付てや
何れあ方る存りませぬが橋の上から川へびり
りものまをて流れて居られぬ流があつてさるく

ござうませうがあらる途端の拍子合をあるも入らば
 舟の中へ落さくらあつてく運送ひあまの命たま
 うらととききひふおぬるものかちてあつておぬ
 ちたれトら見て男の決ぐも推量の通う活て居れぬ
 どの活れまゝ人のひまかたなれたあのみ難是非ある
 捨るは命ト受て仙八もまの毒息ハッ命令を捨る
 いひ次とらとちや能くあるとどのげつちもせうぐす
 飛まば舞延るト命のごくあつてあつたあつたあつと

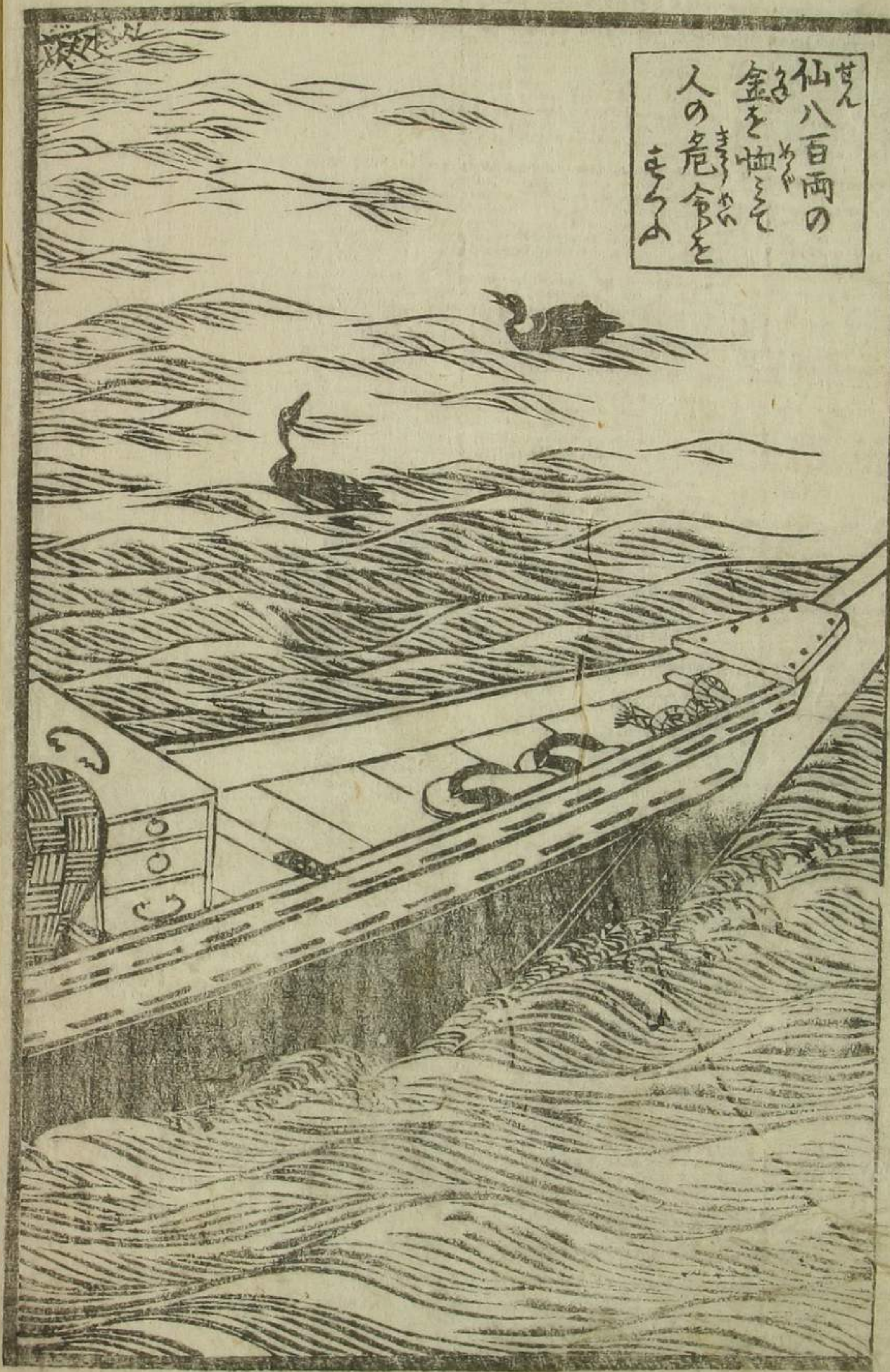
能くの中通う存じの外は方でおのまもせんも向てん
 かのらぬものもござうます候あまのちまも持たる人の
 身のうでを喉か利おひなげいお母いひらふ次んあら
 福にもふ測る縁の助けあるのち極とら藤とも結合
 彩一の寶具屋福有漢つらさの者おまをいまる何の
 かんてござうますト聞直とてあつてひひかて彩一の
 女をば免ささか町お次お初歩のたれようはら直はは
 ござうますが今でいひ代役おれを直られさか今戸ある

橋場家の西屋敷より大切なる金百両を盗んで戻り
 道よるふらふら船へ出遭へ是れ非か〜ト云われ
 いらざる花街の骨柱の床も陸へ入り相の鐘も
 騒ぎもい走りふらふらと〜ト云獨り急ぐも暗き仲夏
 田舎のともちび突的喧嘩笑ふの勢は雑多
 七重の腫を八重お折種々〜ト云ても夢入道なくその
 うちば方の本意はうら七八人立ちく慮外なる奴ト打
 て懸る傍如無人の行状も適う及を免るまで詮

わらわさ相ひとあり打ッけまら敷き合〜ト云自破
 乱〜ト云逃去ふヤレ妹〜ト云おひ〜ト云衣類のお〜ト云
 列を直髪ハ〜ト云られ新の〜ト云懸る〜ト云は安ふん分
 懐中を捜〜ト云えれ〜ト云百両の金を本集れ〜ト云の面を
 五人の所へ立ぬ〜ト云方候も〜ト云免やせぬト角や
 せぬトと種々〜ト云あんと〜ト云ても百両と〜ト云金無事
 ぬま〜ト云面も〜ト云親へ貸苦の徒〜ト云〜ト云りつて
 進退〜ト云ふ谷〜ト云りしも仇ある色ふんを〜ト云られこの災

鶏あひを身みお交ましも過と去き宿縁しゆくゑんの因果いんぐわい少すくく死ぬしぬよと
 してそのあまあまへへ小こえ情じやうを究きゆうりり下したおののト走はしり来きり
 指さしのの入い飛と由ゆ拍子はつし小測せうそくららずも助たすくる命いのちの面めん目めを
 とも死しままねばあららずませお下したままてて仙せん八はちののハテハテ交まへへよよく
 似にててももああままののででささづづららますす私わたくしももうう小角田すかくた家けの
 也や全ぜん敷しきらら令しやう法はふををてて戻もどりりががけけ途と由ゆをを方はう一いつ其そのままらら
 るるででもも互たがててみみちちににああららふふ付つととでで命いのちをを受うけけてては
 川かわ筋しんををぬぬりり道みち丁ぢやうとと能あた持もち合あせせりりゆゆもも交ま教きやうままらら

其そのららああるるのでで大だい切せきなな命いのちをを捨すててののちちををああららひひにに
 その百ひゃくああのの令しやう私わたくしがが命いのちをを上あげげまませせりり羽は巻まききららぬ
 半はん百ひゃくああ色いろガガリリくく是これをを持もちてて整ととのととののををかかへへりり
 ああららぬぬ私わたくしももまま人ひと持もち逢あむむ逢あむむたたりりててはは迷まよひひををすすトト無な
 理り亦またりり小男こなんののふふ流ながせせばば男おとこのの後あとにに現あらわわれれとと百ひゃくああのの令しやう
 おお一いつ裁さいきき偏へん不ふ獲とく生せいするする公こう化けのの様さま一いつ決けつ小こおおをを
 ととああららいいううああるる仲なつりり仏ぶつららとと教きやうまま度たぎあありり器きををああららひひのの
 面めん目め小こ私わたくし入いりり列りやく並なみととももああららぬぬ風ふう情じやうああららぬぬがが仙せん八はちああららひひ



せん
仙八両の
金をゆき
人の危命を
まらふ

十
二
三
四
五
六
七
八
九
十

小服こらきへ付つさせサハ縁えんもあらバ又射面とらめんとせ死し立たられ
て彼男かのめも是非せひも種たね入いれぬあかぬ毎まにさく漕こ
舟ふねとトモの方かたとらりる男おとこハ獨ひとり延の上のく
送おくりてつゞきおんが寶屋たからやの禍わざを種たねつさぬハ宮戸川みやとがわ
の分ぶん根ね者ものとらりも多おほ理りてハあるハ代て流りゅうの身み分ぶんでさ
百ももあの金かねをさぬで大造おほぞうともおのりさろくく人の身みの
くも死しさす名なもゆきと号ごうく引ひくといふハ
想おもひあるゆゑハあるア五いがひひりて下くだけさぬ秋あきおと

てこの命いのちの親おやハ思おもひ生な涯げにまねの汝なませぬぞト
尻しり引ひ揚あげ逸散いつさんおとろくび勇ゆうんで走はり仙せん八はちを
奪うばへるおんませんさろくト漕こあがららモ宝屋たからやの仙せん八はち
さぬおんませんハさぬ減へるア結むす縛なる切き徒とをさぬ
まこの倭やまとが百ももあのとらり大令おほきみをア男おとこおききつら
おんませんが又また且かつ那なの希まれと大おほ首くび尾びぞらト托たくの
ますト果はつごもかきの毒どくでぞらります仙せん八はちおんま
百ももあのくろの坊ぼく下くだ令きみをめしりみ次つぎて人の令きみも拍う

ますは人助ひとすけてらうがきつやます〜ト白地おしろい小話せうわ〜として
 大車おおいもあるまふふテてまが宮戸みやと川がわの分限ぶんげん者ものどど毎主まいしゅ〜
 ある程あるほどさうありあはれあはれぞんぞんまのの貧乏びんがわ人の目めうらるうらる
 と百ひゃくあトとぶおお三さん行ぎょうの漢かんれれ中ちゆうああれと福ふく右みぎ邊への
 中ちゆうぶぶんんでで〜ららが守しゅ帯たいの銭ぜに百ひゃくででももぶぶららますますまま
 〇それそれ小付せうづきケケてもてもママノ男おとこノ命いのち更さら加かののああるるはは合あせせ者ものと
 鳴なる難なん後ごののちちふふささやや寶たから盆ぼんののぬぬささ〜〜ああをを付づけけが
 仙八せんぱち〜ハハおおまま〜トト陸あつ入あるるふふ 毎主まいしゅ〜アアトトモモ〜

舟ふねの中ちゆうふふ此こゝ棟むねののががぶぶらら〜ますますトトああててああすすのの守まもりり符ふ
 仙八せんぱち〜ととれれのの今いまのの男おとこががささううとと話わ〜とと毎まい〜はは忘わすれててああるる
 とといいへへるる命いのち拾ひろひひ〜とと運うんのの強つよいい男おとこのの守まもりり符ふままんんざざらら
 てもてもああるるふふトト其その終しゆう〜びびふふああららてて仙八せんぱちハハ寶たから盆ぼん〜ととああるる
 度たび〜まま人ひと福ふく右みぎ邊へのの〜ふふ角かく田でん家けのの油あぶら籠かごよりより金かね二に
 百ひゃくああ清きよ〜をを来きししよよ〜ををととりり帳あし面めんのの勘かん定ぢやう〜ををささるる
 ゆゆ〜ああくく漢かんせせ〜ととああてて又また〜福ふく右みぎ邊へののがが居ゐららるる人ひとののいいらら
 んん靜しづかかノノ身み投なのの男おとこののままををととりり洋やう〜ふふ物もの陪ばい〜

命を捨つる事のどくさふ百あいの命をきて立ぬじト
 後糸の始末を告て只中流るれい余うんのせく候ふ
 この男の名もろくくふあざりしトまじくより禍右衛門
 心をい女ト拍て感ふは連れ下器量あるとらそらひ
 吾身代わ相愈せる魂非く家ト却て是を肯て受せ
 しん又格別のもありとく不謂意雀あんを大鵬の
 心を知らんやトは是ホのるを茶つらうされば仙八を
 兼ふる舟宿のま人も百あいの命ふ行を渡り仙八が

身のうをあんがふとの後禍右衛門が賞と受せし
 吐くをせく又く心消飛さく今持の扱ハ列る
 のト是より日毎ふ来まる客ふ野しとい仙八が嘆を
 あし寶屋禍右衛門の笑ふ宮戸川の大分限者あり
 と吐くくふあざりのそれを感ふまし奇代の跡候あり
 と花街のちまきでも評判ありこれバいやく禍右衛門が
 名世間ふあふくくまふく徳侯左衛門方よりまの
 金銀を渡りまじく一月もあざるらふ百あ余の利

寛之 酔ひも偏へ仙八が働きまのりトとまらり
 潤家 酔ひも立これバ仙八のりまらるる年やとまら
 番改 酔ひも立これバ仙八のりまらるる年やとまら
 役を羨るるるの面目とらふく 志をまらしてはる
 愛ふ又福右衛門が史奴の中ふ一人の男の子ありけり
 是を福の女と名付ケ初めのとらふく 何これとまら
 る 是を福の女と名付ケ初めのとらふく 何これとまら
 琴 碁書画香茶蹴鞠のなごひまでもまらびすと
 りるまら 今年十八才あれどもま質も弱くして

物の静あるを好るはるまらなるふ下乃の園亭を
 補理られ小園毫て指吟の樂を杖杖とまら
 依て且まら出入るす 仲景子邈の們利又宗且の
 族 容も福右衛門の史奴小内通とらふく 今陽史の
 ちまらあて草木まら芽を養へて花ハ蒼口とて明む
 時節あるふ由令即の新陰気小園毫まらるるり
 偏へ病を招ぐ瑞まらるるも天地の氣も連るもの
 られば疾ハまらるるをまらるるをまらるるをまらるるを

ナト 向島辺にお借交しとしか何ありトん中と聞るふ
 素より 惣換のふれ獨り子のりありせば禍存の
 夫婦もそれを案一 只管その借しを嘆きとれれば
 たりや賢しと幸我子貢の糸を飯てお替問分
 江戸郊の比 辞お案られつ禍の女も外あるなよえ
 或日又六人の先生等とともおむら島一ひりひり守
 昔屋の樓上お洒落等とて金馬西山お段々れば
 是より 素お青樓の夜ぎらをえん又素が習つて

格別お面白めらんと禍の女が心を羈て糸竹の
 業お秀なる 婦女子を救ふおふらち素お玉免の
 冷を水面お泳り挂の 權蘭の 槳艇を扣てらふ
 声川風お敷しと 蚊虻の 群集がぶく 舟主玉の
 汗を流しとて 之谷の 堀をゆき腕おまらせと 漕行ぬ
 色節 是空と 説く 燕と 情の 二河 白道 其横を
 の 別難 苦を めて 二途の 流且の さと 濁るる ありもす
 馴るる 都の 仲の 町 盛て ある 宝屋の 禍の 女も

始りて青樓の花を眺望茶屋の床机（まど）身を倚（よ）て
 救多（たすけ）の倡妓（けいぎ）のゆきうふ装（ま）をうつる（う）る（る）粗（こ）比（ち）中（ちゆう）小（せう）金（ぎん）
 蓮（れん）をまきむる（む）りと愕（おどろ）率（す）をたたる（た）斗（たう）りあり（あ）幫（はう）間（かん）未（み）社（しゃ）の
 目（め）白（はく）押（お）して（し）席（せき）遂（ずい）お列（れつ）を（を）る（る）一（いつ）丈（ぢやう）ト呼（よ）羽（う）織（お）ト（と）糸（いと）
 ま廊中（らうちゆう）の藝（げい）者（しや）を招（ま）く三（さん）弦（げん）の音（ね）ハ天（てん）地（ち）を（を）る（る）
 篠（しやう）ハ声（こゑ）ハ梁（りやう）の莖（かき）を飛（と）を酒（さけ）ハ（は）こ（こ）ぎ（ぎ）で池（いけ）とく音（ね）ハ
 積（つ）で恰（あ）も肉（にく）の林（りん）の（の）ど（ど）一（いつ）箇（か）の先（せん）生（せい）まも宝屋（ほうおく）の
 家名（けい）ハ花街（はなまち）まもも源（げん）とある（あ）れバ禍（わざ）の女（め）が（が）あ（あ）ま（ま）中（ちゆう）

ある（あ）る（る）托（たく）び（び）を（を）る（る）さ（さ）び（び）笑（わら）は（は）茶（ちや）の種（たね）を（を）る（る）小（せう）舟（ふね）で（で）ぬ（ぬ）る（る）
 仙（せん）と（と）そ（そ）との（の）以（も）名（な）高（たか）き（き）巴屋（おんや）の胡妻（こさい）た（た）丈（ぢやう）ト（と）り（り）を（を）
 茶（ちや）を（を）招（ま）ぎ（ぎ）種（たね）を（を）る（る）さ（さ）び（び）ト（と）資（し）意（い）小（せう）舟（ふね）に（に）る（る）人（ひと）を（を）
 て（て）後（ご）小（せう）綱（なう）の（の）女（め）が（が）さ（さ）ら（ら）の（の）ひ（ひ）ト（と）号（ごう）して（し）合（あ）宿（しゆく）を（を）程（ほど）積（つ）り（り）
 春（はる）の物（もの）を（を）持（も）ち（ち）酒（さけ）も（も）長（なが）湍（たふ）や（や）ぐ（ぐ）じ（じ）容（よう）子（し）小（せう）舟（ふね）に（に）る（る）人（ひと）を（を）
 け（け）鼻（び）子（し）を（を）て（て）お（お）茶（ちや）の（の）ま（ま）を（を）ら（ら）せ（せ）ん（ん）ト（と）謙（けん）会（かい）社（しゃ）の（の）地（ぢ）の（の）ひ（ひ）付（つ）の（の）
 是（ぜ）ハ（ハ）と（と）ま（ま）を（を）る（る）下（げ）敷（しき）向（むか）ひ（ひ）て（て）られ（れ）を（を）鼻（び）紙（し）ハ（ハ）分（ぶん）館（かん）妓（ぎ）春（はる）
 小（せう）舟（ふね）の（の）ま（ま）を（を）て（て）ま（ま）を（を）ら（ら）せ（せ）ん（ん）ト（と）織（お）り（り）を（を）ぬ（ぬ）る（る）女（め）が（が）あ（あ）ま（ま）中（ちゆう）

あらんと母の糸を紙に捨り是ハ倡婦のおま首を
 胡妻が糸をさし一糸供らす茶を立て銘く出す
 胡妻も老よりうらち解くは茶を吞財司難妓は
 浪とらるるを呼ぶの紙に捨り金をとる上テこそ
 中なる菓子ハ妻不給くるあられ皆さん方ハ
 せんト 幫間 弾婦 多不結らす茶をせと彼は
 見傲おさすかの江戸神先主其のハ一言お鼻極を
 捲くれ空中も殆んと真さめて足くれハ禍の女ハ同

増を利と借も殆り一見幸散しせトさやめり
 交ふ不皆るも詮方あくくち様めて茶金の行
 立おれハ悲度申大門ほどぐ足送るるあて唯
 禍の女ハ磁町のあまの駕籠ハ一騰の差を結び
 我妻ごぞ立ぬるぬ斯くその雙日番路の仙八是を
 蜜小ゆめてまあご口惜くおひ且尋出運るる
 馬車と窓や辻蒲茶坊まらら母の道のみハ
 なる今まのまもあられ若出形ハ私をとるる

日乃南村巴玉の胡妻を又ハ往昔の高尾ノ子
 雲々の後ありと評判ある倡妓を押し強くも茶釜不
 招きならず茶不口採の菓子下ハ何れもどや宮戸川の
 分限者と呼ぶ人の由令所ある狂びやと供も瑣細
 少分下獨り暮るるもと蓮のこほ余うお境入りの
 禍の女が居るふらう移りゆくはしくおとすく
 後を立扱もそ倡妓を笑ふ客のふゆあるもの
 口傳ありつゝ身不金箱をよめく行くはれハは里ふ

おそ 狂ぶ二ツ六の世事ト人情不疎して美理不離き老の
 け婦不いぞとつゝあふを能き氣をゆくと且略奪のふある
 りのハは境不都らずとつゝそのまらまら倡婦を笑
 ておまの道がまふ合ふるとして史記ありて狂ぶるん
 客のふハある恥ありト是大通論の口傳ありて彼
 先生もまの知るおあふはこれハ胡妻を又ハ室の
 若島形と知つゝふ新めをらあてその袖中ハ
 探るゑるのち夜あらんアらん情ト只管嘆息は

けうくハおぼろぐすあがらも私一がお借はりまうりめ
 胡妻をまたふ肝魂をとり挫がむんバ寶屋の赤名と
 泥あお釋さるゝと劫しゝバ禍の女もまんざらトハ
 母のハず解ふはるの借り人余り人まかりて我もあぶ
 ろろと今般ハ甚方と只二人をせりトトハハ
 勿論のころでござりますとこの日の夕暮をこぼしと
 清く福の女ハ仙ハを召連と花街とさうとぞむ
 くる蘇あちちと鬼ハ後持のなと人のとくは仙ハ

さぬで倡妓のあふ益ある金箱ハ貴ねとも借をえ
 是を帯してふ汁るるの百中百的韻語あるす
 あらざるハ天性秀才聡敏の生質あるが故ある
 及ハ又巴豆が解ふ赤育一彼をくらも入る年
 十六年奉ふあつて一昨大がらある生れハ十七八あもる之
 くれが美人半女も付待花の園き初と大きハ飲
 徳義ハ練まある一標致又尋あるあふれハ人
 令依けの席間と尚書ものハ飾まる花の粧ハハ

九天の仙女月宮の嫦娥龍宮の七娘も是れ後
 一むねの心算なり



菱川師信画

おきくらひのひて実の父や兄ふ巡り遭んみふくら
 ききたりの胡麻平不歌うれて歌苦界ふ沉これが
 せめての尋するも愁りの夜もあまづく候ふ父への苗
 字ある胡妻をその候我名およびなよをいひされが
 半女の実ものともは言を候夫ふはけての奇
 偶といふの喜方の知るるアノ胡妻ハコが家の白嵐
 あつたるお儀と候を候とて妹とぶんとほし花街の弘
 をもあさんト我日頃おのい居るるが今喜方の名を

胡妻とよぶ所もあまの胡妻が妹とよぶ
 一統小胡妻が身を殺して洗ふ突ありの親戚もいと
 巖重なるの縁を胡妻が懐を胡妻が懐を胡妻が懐
 理てる花美ををばしるされば廓中の雲も空
 多謙倉在卿もども巴豆の胡妻胡妻の極楽浄
 土の釈迦浄土二も仏とを伴判する

三曲廓日記朝露全傳卷二終

けねて一寸のころよ

蛇頂石

京鳩居堂製

紫金錠

尾羽藤屋源兵衛製

和疝丸

江戸坂本製

美艷仙女香

右に茶取次仕の市用向は作付を正に振備を希とん

書物屋

名古屋傳馬町二丁目

美濃屋清七

け茶毒由毒飲咬付或はさしたる月ひて平愈する

け茶ハ乳つけ先まい毒帯一酒の及ひ腹のみむつ久
づはうあのかうりまうん若又毒曲をたをむ入る月ひてよきこ
むり

け茶ハせんせん一ゆく、古今女流の大妙薬
妻妾ハ包帯あり

け茶ハ市角の茶也切格別なり妻妾ハ包帯あり

